

『砂漠の国の柔道場』 『第六話』 湾岸戦争時の柔道リレーション

岡本文夫 （元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



イラク軍の砲撃に 5-6 時間耐え、これから南へ退避する

毎週土曜日の柔道の稽古は、湾岸戦争突入の二日前まで行った。これは、筆者が豪胆だったからではなく、稽古を通じて腹の底から気合を発して鬱を発散しないと、とてもではないが精神的にもたなかったからだ。危機感の高まりとともに、当然の結果として稽古に来る弟子の数は激減していた。しかし、ローカルガバメント高官の子弟たちは、比較的最後まで顔出ししていた。何故ならば、サウジ政府の強要で操業継続させられているアラビア石油従業員と同様、彼らもまた役職への重責から最後まで退避を許されない立場にいたからだ。従って、その子弟も道場へ来ていた。

筆者は、彼らの参加動向を危機管理のセンサーにしていた。まだ、彼らが参加しているようなら、まだ決定的な状況には到っていない筈だ。一方、筆者の行動も、彼らから真剣に観察されていたのは間違いない。

『米国と特別な関係にある日本だから、密接に危機管理情報を得ているのではないか。まだ、岡本が柔道みたいな馬鹿なことをやっているなら、まだ大丈夫な筈だ』日本にそのような外交的実力などないのに、光栄な誤解である。先に、姿を消したの

は、政府高官の子弟たちだった。

先週までは稽古に来ていた少年たちだが、開戦の二日前には、誰も来なかった。

これはただ事ではない！と全身に恐怖が走った。ダダッと走って、何回も何回も大きく前方回転受け身を取って大汗を流すまで、恐怖は去らなかった。

実はこの日、その種の予感があったので、道場の入り口への張り紙を準備していた。

『War will be soon over. Then return back and train Judo together. Good luck ！』
律儀に張り紙して道場を去る時、道路に車通りは殆ど絶えて、カフジの街はゴーストタウンと化していた。

Shipping の責任者である筆者は、開戦の一週間前に、最も真面目で優秀だと評価している部下 5 名に最後までついて来るよう指名して、残りのスタッフには残留するもよし、退避するもよしと指示した。要の東西を問わず、「お前が必要だ！」と指名された者は男のプライドが満たされて誇らしくしていた。その他のスタッフは上司のエクスキューズを得るやいなや、脱兎の如く姿を消した。

一度は同意してくれた 5 名だったが、開戦前日の朝、3 名は震えながら退避許可の哀訴にきた。現地人社会に急報が走ったのだろう。部下の大部屋に入ったら、残りの 2 名もデスクで腕組みして渋面していた。

「明日になったら、お前たちももういないんだろうなあ」

「いえ、私はミスター・オカモトと約束しました」

健気な二人、ムゼイニーとセイフは、可愛い部下であるとともに、柔道の弟子でもあった。特にセイフは、筆者の指示によって道場開設の候補場所を探し出してきた可愛い部下であり、弟子第一号でもあった。

一方、日本人サイドはどうであったか。

前年 7 月の湾岸危機勃発直後、ナーゼル石油大臣から発出された操業継続厳命によって日本人従業員の退避の道は閉ざされた。時を移さず、小長啓一副社長（当時）は特使として現地に赴いた。これに先行して、濱田明夫監査役が折衝のお膳立ての大役を担って大臣官房に根回しした。カイロにある世界最古の大学アズハールの卒業生であった濱田は、政府有力筋に折衝できる社内唯一の男だった。小長特使の誠意と熱意によって、折衝を避けたいナーゼル石油大臣との面会がようやく実現し、政府命令を順守するも、最後の最後には退避によって従業員の生命の安全は守る申し入れがなされた。内務省が権力を掌握するサウジにあって、経済閣僚に過ぎないナーゼル石油大臣には戦争突入を予告できる権限など有していなかった。しかし、開戦前日の午後、鉱業所駐在専務宛に、石油省大臣官房からと推量される謎めいた電話連絡があった。

「明朝未明、何か緊急連絡を入れるかもしれない」と。大臣は言葉を選びながらも、小長特使との約束を守ってくれたのだった。

翌朝未明の戦争突入の急報は、鉱業所従業員の緊急連絡網より、東京の妻からの国際電話の方が早かった。「あなた！始まったわよ。直ぐに逃げて下さい！」

「うん、実は解ってたんだ。勿論、直ちに退避するが、俺は常に最善の選択をするから

大丈夫だ！ただ、今までみたいに何時でも電話連絡できるかどうか解らんが心配するな。子供たちにもそう伝えてくれ」「あなた、頑張ってね！」。

筆者が、次にとった緊急行動は、最後まで引きずってしまった可愛い部下への退避命令だった。うれしや、二人はまだカフジに止まってくれていたのだ。

「お前、本当に残っていてくれたんだなあ！」

「当然です。ミスター・オカモトとの約束じゃないですか！」

「これは命令だ！直ちに手近かなシェルターに潜るか、車で南に走るか、どっちかにしろ！Good Luck だ！」

退避命令を出して、緊急荷物を握ってシェルターに向かって走り出した時、イラク軍の砲撃は始まっており、突然吹き上がる着弾の砂柱が恐怖を煽った。

我々日本人は、多国籍軍のファントム機の反撃によりイラク軍の砲撃が休止するまで 5, 6 時間シェルターの中で耐えていた。そして、300 キロ南のダンマンまで車で退避した。ところが、毎晩続くイラク軍のスカッド・ミサイルの夜間攻撃から戦争の長期化が覗えたので、アラビア半島を横断しジェッダに向かった。チャーター機を手配してアテネに辿りついて、やっとコマーシャルフライトで帰国出来たのだが、戦争勃発後 12 日間かけて夢にまで見た帰国がかなった訳だ。

45 日後の終戦を待って、我々は直ちに砲撃で破壊された鉱業所に戻って、復旧作業に努めた。砂漠の民であるアラブ人のロコミの速さは独特のものがある。筆者の帰任を聴いた部下たちが続々と戻ってきてくれた。ムゼイニーとセイフとの再会の時は、お互いに涙を流して喜んだ。抱擁を解くと、セイフは同僚たちに向かって興奮した大声で叫んだ。

不可解なアラビア語だが、「お前ら、先に逃げやがって、この野郎！」ではなく、

「ミスター・オカモトは逃げずに、先ず俺たちに退避命令を出して下さったんだ！」

という事らしい。取り囲む部下たちの敬意溢れる眼差しから、それを察することが出来た。

随所に被弾破壊の跡が見られた現場の復旧、世界中の船会社の機雷の危険によるアラビア湾最奥部への配船拒否への対策等、立て直しには 4 ヶ月間を要した。単身赴任は 3 年とのルールを超えて、筆者の駐在は 4 年間に達していた。事業再興の落ち着きを確認して本社帰任するのだが、それに先立ってすることがあった。それは、ムゼイニーとセイフに二階級特進の栄誉を与えることだった。鉱業所のアラブ人従業員の人事マターは日本人マネジメントの権限を離れて、サウジ人上級副所長のアリ・カサランが司っていた。幸い、彼とは良好な信頼関係にあったので、ざっくばらんに主張して、検討に値すると言質を得た。そして、後で気を悪くされては困るので、職制外ではあるが石油省始めローカルガバメントの有力者たちにも同じ話をする旨を付け加えておいた。

本社へ帰任して総務部次長として激務を楽しんでいた頃、ムゼイニーが研修出張で来日した。勿論、一席を設けて歓迎したのだが、嬉しそうに報告してくれるには、

「お蔭さまで、昇進することが出来ました。それで、ミスター・オカモトは、この次は何時赴任されますか?」「オイオイ、単身赴任って辛いんだぜ」。
親愛なる元上司と元部下が、同時に呵々大笑したことは言うまでもない。



戦後直ちに現場復帰して、ムゼイニー（左）とセイフ（右）を慰労した



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued